

本震から 10 年後の余震を経験する

(一社) 基礎構造研究会代表理事 杉村義広

昨日の深夜、就寝中に突然突き上げられて目が覚めた。“地震だ”と思う間もなく、強い横揺れが続き、太平洋沖地震 (2011.3.11) を思い出すほど家中ががたがたと揺れた。強さは 3.11 の時とそれほど変わらないと感じたが、数十秒ほど続いた揺れは次第に小さくなり、単発の地震であった。机の上に置いてあった書類はあたりに散らばり、書棚の本類も二重に置いてあった表側のものが一様に床一面に飛び散った。

気象庁の発表によると、2月13日(土)午後11時07分、マグニチュード7.3、福島県沖深さ55km(潜り込んだプレートの内部での地震)であるという。その発表を聴きながら印象に残る点が三つあった。その一つは、この地震が太平洋沖地震(2011.3.11)の余震であるという点である。10年経っての余震と聴くと、あの3.11はやはりまれに見る巨大地震であったことをつくづく感じるとともに、地震という事象は私たちの生活サイクルとは全く違う別世界のサイクルで起こるものであることを改めて思い知らされた思いになる。私たちは自分の生活サイクルで物事を考える習性がついてしまっているが、もう少し自然律に目を向けねばならぬことを痛感させられたのである。

3.11 がいくつかの連続地震であったのに対して今回の地震は単発であったことが違っているが(それでも1分近くは揺れていたように思う)、地震動としては3.11を思い出すほどに大きいものであったことに変わりはない。震源が比較的近い福島県沖であったことが震度としては6弱という3.11に匹敵する結果になったものと思われ、その意味ではこの地震も大地震の一つとして記憶されることになると考えられる。

二つ目は、3.11以前に比べて最近では地震の数が多く起こっており、実態は太平洋沖地震の余震の影響であるという点である。この点からも3.11はいかにまれに見る巨大地震であったかを強く認識しておく必要性を教えられた。

三つ目は、上記二つの点と関連して思い起こされる内容であるが、オリンピック、パラリンピックは復興イベントとして位置づけられていた筈であるという点である。被災地に住む人間としては、いつの間にか忘れ去られてしまっているのではないかとの怒りに近い感覚を持たされて来ている今日であるが、今新聞テレビで話題をさらっているのは組織委員会の会長が女性蔑視発言で辞任、その後継者選びの混乱である。この国はそんな古めかしく、国際的には恥ずかしい話題で右往左往するほど“後進国”なのかとの陰鬱な感想を持たざるを得ない。この憂鬱さに通じる社会問題を指摘しているコラムをたまたま読むことになった。インターネットで公開されている木村英子氏の政治プレミア「弱者の立場を考えない菅首相の「共助」(2021.2.9)である。忘れられない言葉であるので書き留めておきたい。“生きているだけで価値がある社会を目指したい。”